様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2018～2019
課題番号：１８Ｈ０５５６５・１９Ｋ２０７７５

研究課題名（和文）日宋文物交流とその歴史的意義　－真宗時代（997～1022）を中心に－

研究課題名（英文）Cultural exchanges between Japan and the Song Dynasty and its historical significance: Focusing on the Zhenzong era(997-1022)

研究代表者
佐藤　有希子（SATO, Yukiko）

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：４０７４６２３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、北宋第三代皇帝・真宗時代の仏教文物に注目し、その歴史的意義を明らかにしようと試みたものである。2018年度は、南京・長干寺址出土阿育王塔(1011)について、国際学会での招待講演（仏教美術史学会・韓国）および論文執筆（「南京市長干寺址出土阿育王塔の図像と制作背景」）を行った。2019年度は、大中祥符年間に制作された蘇州・瑞光塔出土真珠舎利宝幢などについて扱った論文「唐宋時代の毘沙門天像 －王朝の守護神－」を執筆した。また同宝幢を納入した木函に描かれた四天王図像と、鎌倉時代の毘沙門天像との図像の近似性について論文「青蓮院伝来毘沙門天像に関する一考察 」で言及した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の学術的意義及び社会的意義は大きく分けて以下の二点である。第一に、南京・長干寺址出土阿育王塔(大中祥符四年・1011)の制作背景と歴史的意義を明らかにしたことである。第二に、瑞光塔出土真珠舎利宝幢を納入した木函に描かれた四天王図像と青蓮院伝来という伝承をもつ毘沙門天像（京都・泉屋博古館像）との図像の近似性について考察し、日宋文化交流の一端を明らかにしたことである。総じて北宋第三代皇帝・真宗時代の仏教文物の歴史的重要性を指摘するとともに、同時代の仏教文物と平安時代中期から鎌倉時代初期の仏教美術作品の近似性を指摘した。

研究成果の概要（英文）：This study was focused on Buddhist cultural assets during the 3rd Emperor of the Northern Song Dynasty, the Zhenzong(真宗) period, and was attempted to clarify its historical significance.
In 2018, I was invited to a lecture at an international society (the society for the history of Buddhist Art, Korea) and wrote an article on the Asoka Stupa (1011) of Changgansi Temple (長干寺) .
In 2019, I wrote a paper entitled "The images of Vaisravana in the Tang-Song Period: a guardian god of dynasties ", which referred to the stupa-shaped reliquary with pearl(真珠舎利宝幢), that was excavated from pagoda of Ruiguangsi Temple(瑞光寺) in Suzhou, Jiangsu.I also referred to the approximation of the statues of the Four Devas drawn in wooden box and Vaisravana (Bishamon-ten) of the Kamakura period, in my article, "A Study of the statue of Bishamon-ten handed down to Shoren-in（青蓮院）."

研究分野：美術史学

キーワード：真宗　長干寺　阿育王塔　舎利信仰　毘沙門天像　釈迦瑞像　正統意識　瑞光寺塔

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

申請者はこれまで、7～13 世紀の毘沙門天像の成立と展開の様相を論じるなかで、10 世紀末～11 世紀第一四半期頃、つまり北宋では真宗が、平安朝においては藤原道長（966～1028）が活躍した時期が、東アジアの仏教文化における大きな転換期であることを主張してきた。

従来、平安時代中・後期の文化全般におけるいわゆる「和様化」という現象は、遣唐使が廃止された後、国内において自律的に醸成されたものと考えられてきた。しかし、その言説が「神話」にすぎないとして、従来の「国風文化論」を相対化する研究が近年は盛んに行われている[1]。遣唐使廃止以降、多くの中国文物が流入していたとはいえ、それは奈良時代におけるような絶対的規範性を持ち得ず、部分的な受容がなされた[2]。いっぽう北宋三代目皇帝の真宗朝は、宋代史上典型的意義を持った時期であるとされる[3]。真宗は宋朝が開国以来はじめて正常な方式で即位した皇帝であり、宋王朝のさまざまな制度の整備、皇帝権力の位置づけはこの時期から始まった。文物、書物、宗教いずれも唐以前と宋以降ではその様相を大きく異にするが[4]、真宗時代はその分水嶺にあたるとして、次の仁宗時代にかけて、その政治文化に大きな変化があったとみなす研究もある[5]。

２．研究の目的

（１）　真宗時代に制作された仏教文物の実態を把握し、それらがどのような造形的特質と歴史的意義を帯びているのかを明らかにすること。

（２）　真宗時代の日宋交流について、入宋僧寂照の事績に注目し、文字資料や文物で交流を跡づけるものがあるのかどうかを明らかにすること。

３．研究の方法

（１）　造形的特質の分析

フィールドワークによる文物の確認、撮影、採寸等の調査を行い、造形表現の比較と分析を行う。建築の基壇部などの装飾彫刻や、碑刻、陵墓彫刻、経幢、墓誌などにみえる文様彫刻にも注目する。その際、制作年が明確なものを優先的に扱う。

（２）制作背景の考察

『続資治通鑑長編』等の基本史料を活用することはもとより、碑石などにあらわされた文字史料の翻刻、校訂を行うことで、制作背景を考察する。人的ネットワーク等を考慮する上で重要な手がかりとなるため、本研究では碑刻を重視する。

４．研究成果

2018 年度は、南京・長干寺址出土阿育王塔(大中祥符四年・1011、以下長干寺塔)について、国際学会での招待講演（「南京市長干寺址出土阿育王塔の図像的特質と制作背景」於仏教美術史学会・韓国)）および論文執筆（「南京市長干寺址出土阿育王塔の図像と制作背景」『奈良女子大学文学部研究教育年報』15 巻、2018）を行った。南京市・長干寺は六朝時代以来の舎利信仰における象徴的存在であったことがよく知られる。近年長干寺址から、北宋時代の阿育王塔を中

---

[1]新編森克己著作集編集委員会編『新編森克己著作集』1～5、勉誠出版、2008～2015、等。

[2]皿井舞「解説　日宋交流と彫刻様式の転換」『増補日宋文化交流の諸問題　新訂森克己著作全集 4』勉誠出版、2011。

[3]王瑞来『宋代の皇帝権力と士大夫政治』汲古書院、2001。

[4]小島毅『中国思想と宗教の奔流』（『中国の歴史』07）講談社、2005。

[5]久保田和男「玉清昭応宮の建造とその炎上　–宋真宗から仁宗（劉太后）時代の政治文化の変化によせて–」『都市文化研究』12 号、2010。

心とした、舎利信仰に深く関係する遺物が多数出土した。なかでも阿育王塔は、規模の大きさと完成度の高さが注目される。本研究では、結論として以下を明らかにした。長干寺塔隅飾にあらわされた異国風の図像、すなわち栴檀釈迦瑞像、阿育王像、毘沙門天像および相輪部の四天王像は、北宋朝における新仏教政策の汎アジア的性格を明確に引き継ぐものである。長干寺塔に記された銘文の分析により、長干寺塔には真宗朝に関わりのある人物が関わっていることが判明した。図像上の特質などを勘案すると、長干寺塔の制作において、真宗その人自身というよりは、その側近であった王欽若とその周辺人物の意図が反映されていた可能性は否定できない。長干寺塔の制作にあたっては、封禅や汾陰祀と同様、皇帝権力を誇示しようとする意識がみとめられる。そしてそこには、自らの王統の正当性を顕示しようとする真宗の「正統」意識が発露している可能性が考えられる。

2019 年度は、関係図書（『中国文物地図集』各省分など）の入手を進めるとともに関係作品の抽出・分析を行い、なかでも浙江省・江蘇省に位置する宋代に関係する仏教遺跡の調査を行った。南京（大報恩寺、覆舟山三蔵塔、霊谷寺、六朝博物館、棲霞寺）、蘇州（蘇州市博、瑞光塔）、寧波（天童寺、阿育王寺、保国寺、寧波博物館）、天台山（国清寺、隋塔、智者塔院、石橋、赤城寺、萬年寺、天台山博物館、台州旧城、龍興寺）に赴き、大報恩寺出土阿育王塔や瑞光塔など、真宗時代のとくに重要な仏教文物・遺跡の調査・熟覧を行った。

また、真宗時代の代表的な仏教文物である長干寺址出土阿育王塔、瑞光塔出土真珠舎利宝幢について扱った論文「唐宋時代の毘沙門天像 －王朝の守護神－」（特別展図録『毘沙門天 北方鎮護のカミ』奈良国立博物館、2020 年 2 月）を執筆した。瑞光塔出土真珠舎利宝幢を納入した木函に描かれた四天王図像と青蓮院伝来という伝承をもつ毘沙門天像（京都・泉屋博古館像）との図像の近似性について「青蓮院伝来毘沙門天像に関する一考察 」板倉聖哲・高岸輝他編『日本美術のつくられ方』 2020 年 6 月（発行予定）で言及した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 佐藤有希子	４．巻 46
２．論文標題 「融通念仏縁起絵巻」にあらわされた毘沙門天像	５．発行年 2020年
３．雑誌名 叙説	６．最初と最後の頁 83-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤有希子	４．巻 15
２．論文標題 南京市長干寺址出土阿育王塔の図像と制作背景	５．発行年 2018年
３．雑誌名 奈良女子大学文学部研究教育年報	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 佐藤有希子
２．発表標題 南京市長干寺址出土阿育王塔の図像的特質と制作背景
３．学会等名 仏教美術史学会（韓国）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 奈良国立博物館	４．発行年 2020年
２．出版社 奈良国立博物館	５．総ページ数 175
３．書名 毘沙門天 北方鎮護のカミ	

１．著者名 板倉聖哲・高岸輝他	４．発行年 2020年
２．出版社 羽鳥書店	５．総ページ数 776
３．書名 日本美術のつくられ方――佐藤康宏先生の退職によせて	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考